

組織におけるリーダーのあり方

The role of a good leader in the group

1K05B023

指導教員

主査 山崎勝男先生

井ノ口 鉦太郎

副査 関一誠先生

第1章 序論 組織とリーダーシップ

著者は中学から現在に至るまで、部活動組織に所属してきた。それぞれの組織において主将を経験し、部活動や組織に対し、いろいろと学ぶ点もあったが疑問を持つこともあった。その中で、リーダーのもらす影響、あるべき姿とう点で、行き詰ることもあった。そこで本論文では、このような経験をもとに部活動という組織のみでなく企業のような組織についても組織のあり方と、リーダーシップというものがあるべきなのかということを考察していく。

第2章 組織の概要

世の中には部活動組織のような小さな組織、企業のような大きな組織、大小様々な組織が存在する。それらいろいろな組織が存在する中で、組織と言うものがどうあるべきなのかということをいろいろな組織の概念を挙げ考察していく。組織は、構成員1人ひとりがその組織の目的を理解し、階層や部署の垣根を超え議論を行う場であることが望ましく、これにより、構成員の意欲が高まり「健全な組織」となる。これと対をなして重要なのは組織としての「強固さ」である。会社組織で求められる結果は業績であり、設定された目標に向かっていくには強固さも必要になる。組織における「健全さ」、「強固さ」のバランスをとっていくことが、構成員のモチベーション、組織の方針・業績には重要である。また、組織内において組織員のコミュニケーションというのもなくてはならない。組織における失敗プロジェクトの多くはコミュニケーション不足であると評価されており、コミュニケーション

は重要な役割を担っている。

第3章 リーダーシップ

組織には、様々なタイプのリーダーが存在する。どのようなリーダーが好ましくどのようなリーダーが好ましくないかは組織の持つ目標や構成員同士の関係性により異なる。一般的に階層や肩書きを持つ上司がリーダーと思われるが、真のリーダーとは、階層や肩書きとは無関係であり構成員に内在するものだと考えられる。つまり、実際に指導する、進む方向を示すなどの動作をする人に対し我々はリーダーと言う表現を適応するのである。そしてリーダーは属人表現であるのに対し、リーダーシップは性質や技術などの属性一般を現す属性方言である。本章では実際のリーダーシップとはどのようなものをリーダーシップの概念を挙げ考察していく。

第4章 自分自身の経験から組織とリーダーシップを振り返る

著者は大学の部活動において主将を務めてきた。当時所属した組織は、幹部となるべき部員が3人しかおらず、主将である著者自身が長期間スランプに陥るという決して良い状況ではなかった。それにも関わらず、なぜ1年という短期間で1部リーグへ復帰するという、組織の大きな目標を達成することができたのだろうか。本章では当時の我々の部活動組織が他の組織とどのような点で異なり、そして優れていたのか、いくつかの項目を取り挙げ自分自身の経験から組織とリーダーシップを振り返ることとする。

第5章 結論

本論文より、組織とリーダーにはいろいろなタイプがあることが分かり、どのタイプが好ましく、どのタイプが好ましくないということはなく、重要なことはリーダーの持つタイプが所属する組織に適しているか適していないかが重要であると分かった。その中で、著者のリーダータイプは奉仕型だと考えられた。自身の性格的にもその時の状況にも

「奉仕型」とうのは適合しているのである。自身の経験から振り替えると、たとえ先頭に立って引っ張ることの出来るリーダーが存在しなくとも、組織がコミュニケーションを図り、議論することにより健全で強固な組織が出来ることが分かった。さらに、健全な組織を創りあげることが出来たからこそ強固な組織となり、リーグ戦という目標に対して1部復帰という目標達成に成功したのだと考えられる。